

第二期 第七十七号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 12. 20 定有堂書店 発行

ワクサカソウヘイとドウルーズ

— 形のない方へ —

奈良 敏行

(定有堂 店主)

ワクサカソウヘイとドウルーズ
胸を借りる

奈良 敏行

ワクサカソウヘイ

他者がいなければ、リンゴの裏側は丸くないのか

岩田 直樹

汽水のほとりから (21)

小原 修治

JAZZな街とつとり

萩原 俊郎

ドーハへの帰還

松田 裕史

あとがき稼業

芝野 浩貴

オランダ人、空を飛ばす

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十六

内田 克彦

八代日記 (三十三)

齊藤 仁昭

ドイツオペラ界の泰斗

秦阜 梅林

話すことと書くこと

三浦 永理

お風呂

あぎの素生

…… 編集後記



『音信不通』の一回目に書いたのは、「定有堂のウォルデン池」だった。定有堂は若桜橋北詰にあるのだが、或る黄昏時にTさんに誘われ南詰から夜の川面を見た話だ。桜の季節で水面に桜並木が逆さまに映っていた。「どうよ？」ということだった。確かに感動し心に流動化が起こり、変容する物語として「音信不通」の刊行が始まった。七十六回書き続けて、あれは何だったのだろうかと思いつく。そういえばTさんの著書に『形のない家族』という本があった。流動したものは「形のない方へ」という反復する思いなのかもしれない。そのときは何と言っているかわからなかった。ウォルデン池とかビオトープとか名のりしてみた。

わたしの心の中に同質のものが反復する。ワクサカソウヘイさんは十月に『出セイカツ記』を上梓した。ドウルー

ズも同じ十月から、岩田直樹さんの指導で読み解きを始め
ている。岩田さんは一回目から、精妙な「ドウルーズ資料」
を作成して配布している。哲学の購読なのだ。わたしは、
分かる事だけを自由に我田引水して、それで良しと決めて
いる。自分の中で反復するものには関われない。この傾
斜を「形のない方へ」と呼び慣わす。

ドウルーズはメタレベルのものをオブジェクト・レベル
へ落とし込んでいく。モル状を分子状へ、秩序を逸脱へ。
定住的な発想から外を求める発想へ。イメージ的にいえば
ノマド、ノマディズムだろうか。わたしはTさんの言葉を
借りて「形のない方へ」とこの間の様態を理解する。

ノマドは去りゆき忘れられた頃に立ち返ってくる。ワク
サカソウへイは騎乗で現れるわけではないが、走り抜ける
ように時折わたしに一声かけてすぐ消える。『出セイカツ
記』は語りも文章も途轍もなくずば抜けて上手い。あれよ
あれよと楽しませてくれるが、読み終わると入り口に戻っ
てきているのに気づく。お化け屋敷みたいだ。「ぶぎける
力」の伝道師なので、きまじめに読む必要もないのだろう
が、わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取っ
てしまう。結局分かる事だけしか分からない人なのだ。『出
セイカツ記』は結論に述べる。「我々に残された、唯一の
救い。それは夢想だ。」p.215 この「夢想」を反復して

ワクサカさんは語り続ける。夢想の別名は「ぶぎける力」
だ。ドウルーズのノマド⇨戦争機械だ。『出セイカツ記』
は「セイカツ」から脱出していく話だ。「セイカツ」とは
定形だ。「個」は「形」や「社会」に縛られる。「個」が
社会を破る話ではない。それならツリー状の話になってし
まう。「個」をたくさん生成しながら走り抜ける。これな
らリゾームの方向だ。

《「本当の自分」は、実は他者の数だけ複数存在すること
を許されているのではないだろうか。》p.164

《「個」って、実は他者に委ねて初めて生まれるものなわ
けで。そして「社会」の中にこそ、その他者は存在してい
るわけで。》p.165

《自己の内側から「本当の自分」を探すことなど、あきら
めていいのだ。自分の欲求の有様は、外界にいる他者たち
と一緒に生成していいのだ。》p.165

《そう理解した瞬間、いままで敵に見えていた「社会」が、
急におおらかな存在として目の前に広がった。》p.165

《こうして(個を素っ裸にして⇨引用者補足)我々は新たな「個」
をまたひとつ、召喚する。》p.166

『出セイカツ記』はリズミカルに売れている。レジで手
渡しながら「おともだちですか？」と尋ねると「そうで
す」と返ってくる。おともだちが多いのだ。そういえば

新刊予約も「おともだちの本屋です」とメモしたら満数配本された。その後先日早めに追加の注文も出した。

本屋現場の話だが、「書店」(空間)→「本屋」(人)とレイヤーを考えつづけてきた。例えて言えばわたしは「書店」から孵化した「本屋」だろう。しかし既に「本屋」から孵化した何かが未来のレイヤーとして出現している。ワクサカさんの「ふぎける力」には「強度」がある。本を売る、そしてその原点は？ とオリジナルに遡って考えていたら、すでにシミュラクルの時代に入っていたのかもしれない。

2022. 11. 16

徳永進 『形のない家族』 思想の科学社 1990

ワクサカソウヘイ 『出セイカツ記』 河出書房新社 2022. 10. 25

岩田直樹 『ドゥルーズ資料』 定有堂書店HP掲載

ワクサカソウヘイ 『ふぎける力』 コア新書 2015

太極拳教室(会場) 定有堂三階 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「ドゥルーズを読む会」

(講師) 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

胸を借りる

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

拙著『出セイカツ記』が刊行されて一ヶ月経った。

おかげさまで多くの読者の方々に届いているとのこと、ホツと胸を撫でおろしている。感想の手紙やメールなども続々といただき、ありがたいかぎりである。みなさん、けっこうな熱量で本書をきっかけに発露した考えや思いなどをしたためてくれている。そしてそれが、どれもけっこう興味深い。いくつかを一部抜粋して紹介させていただきます。

「『出セイカツ記』、大変に面白く読ませていただきました。どの取り組みも、本当にミニマムなところからスタートしているのに、そこから辿りつく結論が深淵の底にさらに潜っていったようなものばかりで、ぐいぐい引き込まれて拝読いたしました。拾っただけの石を売るのには、隣の屋台の女性の話をともにものすごい頭をフル回転させて、素晴らしいシステムを生み出した半面、ものすごいリサー

チの末にあっさり釣れたスッポンでお金を稼ぐのには、何か鬱々とした気持ちを抱えてしまう……。そういった心の機微、頭の中に小宇宙のように勃発し広がっていく思考の流れ、とても面白かったです」

「『出セイカツ記』を読んでいる中で、ひとつ再認識したことがあります。それは、あらゆる差別、排斥、狭隘さの根底にあるのは『不安』という情動だということです。『出セイカツ記』に描かれているのは、そんな情動を均すための個人運動でもあるわけで、つまるところ平和な世界を実現するための新約聖書としての読後感もあった次第です。ノーベル平和賞確実ですね！(笑)」

「読んでいて深く思いました。どんな不安も要するに『食い詰めたらどうしよう』というところを根城としているのだ、ということに。人間関係の不和からくる不安であっても、その背骨にあるのは『このコミュニティに入れなかったら食えなくなってしまうかもしれない』というところを端に発しているのでしょうか。本書を読んで、根源的に渦巻いている不安が薄れた気がしました」

こうやって並べると、同じ一冊に寄せられた感想には思えなくてウケる。冒険記として読んでくれる方もいれば、世界平和の書として読んでくれる方もいて、そして一方ではメンタルトレーニングの本として読み解いてくれる方

もいたりする。いやいや、ありがたいかぎりである。筆圧の強い丁寧な感想をいただけることが、なよりの励みになる。

二つ目と三つ目に紹介した感想の内容に触れたい。まったくもってその通りで、差別というものは、不安と強く結びついている。そして、人間関係の思い煩いというのも、「ご飯に困ったらどうしよう」という不安と肩を組んでいく。

差別をする側は、差別を行うことで自分のコミュニティを獲得する。他者を攻撃することで、自己の生存保証が果たされる範囲を露わにしようとするわけだ。それは端的に苛烈で乱暴で幼稚な不安との付き合い方であるといえる。もちろん、生活を紡ぐ過程で不安を飼いならすためには、コミュニティの獲得というのには必要不可欠であるといえる。しかしながら、他者を傷つけながら無理やりに確保したコミュニティというものは、総じて硬質なものである。風通しなどあったものではなく、次に発生するのは区画内での分断であり、内外に向けた冷笑の投げ合いである。「有機的」の反語ともいえる質感が、そこには横たわっている。私はこういった差別や分断を生んでしまう不安、そしてその不安に侵されている者を、直線的に軽蔑している。

『出セイカツ記』には、柔和なコミュニティの作り方な

どは書かれていないし、この世から差別をなくすための5-
指南のようなものも載っていない。はたまた、他者や自分の心を操るためのメソッドなんて、一文字も打たれてはいない。綴ったのは、不安という情動との丁寧な付き合い方、赦し方、ただそれだけである。あとは、読者の方々の胸を借りるばかりだ。

嬉しい感想が毎日のように届き、まだまだこの世は捨てたものではない、と悦に入っている日々である。あとはノーベル賞授与式への招待通達を待つばかりだ。

他者がいなければ、リンゴの裏側は丸くないのか

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

タイトルを読んで、「意味がわからない」と思われた方が大半だろう。リンゴ(現象学の解説で頻出)の見えない側はなぜ丸いとわかるのか、という問いである。

國分功一郎の本がよく読まれている。『スピノザ―読む人の肖像』(岩波新書、二〇二二年一〇月)は丸善丸の内本店十一月第二週の新書売り上げ第六位、『暇と退屈の倫理学』(新潮文庫、二〇二二年二月、単行本を既読)は文庫第八位である。スピノザ研究でスタートした國分は、ドウルーズ論(ドウルーズはスピノザ学者としても名高い)、民主主義論、中動態の哲学、当事者研究など幅広い分野を論究し、研究室と社会を往還する学者である。

一月月上旬、定有堂書店店主の奈良さんに、他者論に関する秀逸な論文を教えていただいた。檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドウルーズの二一世紀』(河出書房新社、二〇二二年)所収の國分論文「類似的他者―ドウルーズの想像力と自閉症の問題」(一四三―一六六頁)である。

九月下旬に読んだ『意味の論理学』(上下巻、河出文庫、二〇〇七年)は、ドウルーズの代表作の中でも「わけのわからなさ度」が半端でない。理解不能な箇所が全体の三分

の二はあり、数頁進むごとに投げ出しそうになった。

「これならわかる」と感じたのが、國分が取り上げた付録Ⅱ「ミッシェル・トゥルニエと他者なき世界」(下巻、二二五―二五九頁)である。

ソルボンヌ大学の同期でドウルーズの盟友トゥルニエは、『フライデーあるいは太平洋の冥界』(一九六七年、アカデミー・フランセーズ賞、岩波現代選書一九八二年)、『魔王』(一九七〇年、ゴンクール賞)などで著名な作家である。『フライデー』はダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険』(二七一九年)を翻案し、もう一人の漂着者フライデーによって孤島の秩序が崩壊していく様子を描く。

付録論文を読みながら、現象学の「射映」概念を想起していた。目の前に存在する対象の〈私〉が見ていない部分はどうなっているのか。ドウルーズがフッサールに言及することはない。あえて触れないことはかえって強く意識していることなのではないか、と思えてしまう。

「射映」は空間的な対象が現出する在り方を指す現象学概念である。実在的事物は「射映」を通してその姿を「二面的な呈示においてしか与えない」(『イデーニー―I』原著一九一三年、みすず書房、一九七九年、一九一頁)。眼前にある一本の樹木の知覚体験は、その都度

のパスベクティブに依じて流動化する。同一の「ノエマ」(対概念は「ノエシス」)は多様に連続的に「射映」してくる。「絶対に疑いのないことには、ここで「統一」と「多様」とは、それぞれ全く異なった次元に属するということである。」(一四四頁)

こんな当たり前のことを小難しく考究する現象学を引用したのは、前期現象学では「他者」が想定されていないことを強調するためである。フッサールが「他者」について論じたのは、ソルボンヌ大学での講演録に基づく『デカルト的省察』(一九三一年)であった。

ドゥルーズ論文に戻ろう。

〈私〉が見ていない部分の奥行きは、他者にとつての奥行きである。回り込んで隠れた「向こう側」に至るとき、〈私〉は対象の背後で他者と合流する。「他者は、世界の中の余白と遷移を保証する。」(下巻二二三頁)

世界から他者が消えたときはどうなるのか。そのとき、〈私〉の視界は極度に切り詰められる。「堪えられない光と暗い深淵の剥き出しの対立が支配する。……知覚されるものと知覚されざるものは、相互移行の含みもない戦闘状態の中で絶対的に敵対する。……生まの黒い世界、ポテンシャルも潜在性のない世界。崩れたのは、可能なもののカテゴリである。」(下巻二二三頁)他者は知

覚的な場に構造化されている。アプリアリな他者が知覚を可能にしているのである。

いよいよ國分の出番だ。國分の卓見は、ドゥルーズの想定する他者(〈私〉)と類似する他者でなければならぬことを剔抉する。異質な他者の存在あるいは他者そのものの不在は、可能世界の崩壊を意味する。

さらに、村上靖彦『自閉症の現象学』(勁草書房、二〇〇八年)から自閉症者の証言を引用する。「例えば私は近所の家々にも内部があることを知らなかった。すべては芝居の書き割りのように見えていたからである。……見えないものが端的に存在しない。奥行きと裏側が存在しない。」(國分前掲論文、一五二頁)

議論は一步先へと進む。他者は見えていないものの可能態化だけでなく、見えているもの、世界の可能態化をも担っている。「ならば、奥行きを知らない者だけが集まって、それによって可能性のカテゴリが生成すれば、感覚飽和(自閉症の症状の一つ―岩田注)を逃れることも可能だということになる。」(一六四頁)國分は暫定的な展望を述べて論文を閉じる。

リングの見えない裏側は丸いのか。この問いの射程はとてつもなく遠大である。

汽水のほとりから (21)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

前回、哲学者の國分功一郎の論考を引用し、「義としての利他」ということを述べた。が、そこにいう「義」は、所謂「正義」のことではない。「正義」とはSNSの世界に溢れていた(例えば、不倫報道はすぐに叩かれる)、最悪の場合は戦争遂行の理由になったりするものである。では、何かと言えば、それは敢えて言えば「仁義」である。「仁」とは人を愛すること、そこには「利他」の意味も含まれる。「義としての利他」は、「仁義」と言い換えてよからう。私は「正義」より「仁義」の方が好きである。「仁義」といえば、任侠の世界だが、これを例に取れば、「正義」との違いがよく分かると思う。任侠が「仁義」を口にする時、彼らは一宿一飯の恩に身を尽くすのである。「仁義」とは、具体的な他者との関係で成り立つもので、借りを返すという点ではギブ・アンド・テイクの互酬性の問題とも言えるが、お金のやりとりのようには負債をゼロ

にすることが出来ないという点でやはり心の問題だと言える。そこに「責任」の概念が生じるからだ。では、「正義」の場合はどうだろうか。人の尻馬に乗って「正義」を唱える時、人はいくらでも無責任になれる。「仁義」は我が事だが、「正義」は他人事だ。別言すれば、「仁義」は自分の内へ向かうが、「正義」は外へ向かうのである。

実は前号で取り上げた國分功一郎の論考のタイトルは、「中動態から考える利他―責任と帰責性」(集英社新書『「利他」とは何か』所収)だった。國分はそこで「責任」の語を「帰責性」と明確に区別すべきことを提唱している。「責任」は英語で responsibility というように、本来は相手に response 応答することを意味する。一方、「帰責性」は英語の imputability の訳語で、罪や欠陥などを或る人間に帰属させることを意味する。ところが、我々はその意味を「責任」の語で表してしまっていると言っている。その上で更に國分は、本来「責任」が互酬性に留まるものではないことをも新約聖書の「善きサマリア人」を例に示している。

國分はこう述べている。「あの譬え話のなかでサマリア人は、身ぐるみを剥がされ、半殺しの状態で地面に横たわっている旅人を気の毒に思い、介抱するだけでなく、宿につれて行って宿代まで支払います。この人物は旅人を前に

して何かを応答しなければならぬという気持ちを抱いたのです。ここには責任の原初形態とでも呼ぶべきものがあります。まさしく義の心です」と。ここに見える「責任」の概念は、もはや互酬性以上のものである。衝撃的な事件は「善きサマリヤ人」の心の中で起き、その中へ帰着する。國分の論考のタイトルに見える「中動態」とは、まさしくそうした事態をいう。「責任」は「中動態」より生じる。思うにそれは「仁義」が我が事であると言うのに等しい。

右に引用したくだりを読んで、私は或る日本人のことが不思議と思ひ出された。それは三年前にアフガニスタンで不慮の死を遂げた中村哲医師のことである。病氣や飢餓に苦しむアフガニスタンの人々の為に自ら診療所を開設し、井戸を掘り、遂には用水路まで建設して約60万人の命を救ったといわれる人だが、彼が現地を訪れた最初の動機が、幼少期からの虫好きが昂じ、モンシロチョウの故郷を訪ねてみたかったからというのには有名な話である。思うにこの逸話はかえって、彼もまた、あの「善きサマリヤ人」のように、目の前の不幸な他者に偶然出会うことによつて彼らに何かを応答しなければならぬとなつたという事実を物語つていよう。ただ中村医師の場合は、その時感じた「責任」が、その後の人生を変えざるほど重かつたのである。

先だつてペシャワール会とつとりが企画する中村医師追

悼写真展と上映会に参加してきた。上映された講演会は、客死される七か月前に医師が鳥取市を訪れた際のもので、私は三年前のこの会にも参加したから、実に懐かしく拝見した。上映後、医師と共にアフガニスタンで活動した岡山県在住の山口敦史さんの話があり、こちらも興味深く拝聴した。山口氏は現在農業で生計を立てておられるが、大学時代に『医者井戸を掘る』（石風社）を読んで感動し、卒業後すぐ現地へ渡られたとのことである。その志の高さには敬服するのみだが、中村医師からは出会つたその日に「山口さん、国際協力とは何ぞやと議論する前にスコップを持つて人々の為に働きなさい」と言われたそうである。

私はその時の医師の気持ちをこれまでの議論を踏まえ、次のように想像する。「あなたは私の本を読み、私に憧れ、ここへ来たかもしれない。でも、あなたが本当に見つめるべきは私ではなく、餓えと早魃に苦しむ目の前の人々だ。私が彼らに出会つたように、あなたも出会いなさい」と。とはいえ、そう言いつつ、その時感じる「責任」の重さは、自身の経験に照らし、人に教えられるものでないことを、中村医師ほどよく知る人もいなかつたとも思うのである。

JAZZな街とつとり

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

昭和56(1981)年の春、一人の知り合いも土地勘もない鳥取の新聞社に就職した。京都の学生時代はジャズ喫茶によく通っていて、あるジャズ雑誌に「鳥取市は、市街地を流れる旧袋川沿いに趣向の違うジャズ喫茶が3軒も並ぶ街」と書いてあったので、楽しみにしていた。

入社すると「研修」とは名ばかりで、男十数人が一部屋で寝起きし、新聞拡張に回る毎日なので、夜は宿舎を抜け出してジャズ喫茶に通い始めた。

◇ ◇ ◇
個性の違うジャズ喫茶が市の中心部に3軒も並ぶのは、地方都市にしては珍しかった。一軒目は、その頃日本でもTスクエアやカシオペアが一世を風靡していたクロスオーバー(フュージョン)系のジャズ喫茶「アキラ」。

店内はウエストコースト風で、ジャズ喫茶特有の暗さが

なく、マスターは(確か、山根さんと言ったか…)岩美の海でカタマラン(双胴船)のヨットを見せてもらったことがある。ライフスタイルまでリー・リトナーかパット・メセニーみたいな爽やかな風の吹いていた方だったが、店を閉じた後、若くして亡くなったと聞いた。

花見橋のもとにあつたのは「ファイブ・ペニー」。店主のミネさんは押し強い「芸能プロモーター」みたいな人で、「ビデオクリップの撮影であるバンドが鳥取砂丘に来る」と連絡があつて行くと、ジャズではなく、デビューしたばかりのミスター・チルドレンだった。その商魂たくましさで3軒中、最後まで生き残る。

もう一軒は「はいから亭」。マスターの名前は「総理大臣と同じなんです」と恥ずかしそうに自己紹介されたのでよく覚えていて、小柄で物静かな吉田茂さん。元気で背の高い奥さんと「ノミの夫婦」で切り盛りしていたが、実はこの店こそ、すごかったのである。

海外の大物プレイヤーを鳥取に次々招き、その中には、あのアート・ペッパーもいた。彼は鳥取公演の直後(1982年)亡くなった。世界的サックス奏者の最後の演奏をまさか鳥取で聴けるとは…ありがたい店である。ところが吉田さんはある日、ぼそぼそと告白した。「すみません。鳥取では限界なので新宿に移ることにしました」。

新宿に移転した「はいから亭」は、オリジナルLPも出す、知る人ぞ知るジャズの名店になった。やがて「フォックス・ホール」と改称して吉祥寺に移ったと聞き、東京転勤の際に訪ねたが、店はすでに閉じていた。

◇ ◇ ◇
その後、バブル時代の鳥取のジャズはもっぱら「Mobs (モブス)」など若者が集まるダイニング・バーに舞台を移した。毎週がパーティーの喧騒の日々。

その頃、通勤途中に「日乃丸温泉」の銭湯があつて、よくひと風呂浴びて出勤した。銭湯の持ち主は、隣りで皮膚科の医院を開業していた松本先生で、県ラグビー協会の会長。運動記者だった私は鳥取国体の取材で医院によく出入りしていたが、時々「息子は東京でジャズにはまって、もう帰って来ない」と弱気な言葉をもらっていた。

ところが父親の予想に反し、その息子、ジャズ・ギターリストの松本正嗣さんは故郷に帰って来た。しかも「ジャズ・ピアノ界のビッグネーム」を連れて。奥さんの菊池ひみこさんは、私たちの世代にとって学生時代にFMのジャズ番組で聴いていた、まさに雲の上の人である。

夫婦は日乃丸温泉の上にライブハウス「アフター・アワーズ」を開業し、さらにジャズのすそ野を広げようと「鳥取まちかどジャズ」のムーブメントも始めたが、その頃には

私も倉吉に移ったので、お付き合いはほとんどない。

◇ ◇ ◇
私の知る限りの「鳥取のジャズ」をざっと振り返った。余談だが、鳥取に来た秋吉敏子さんを摩尼山の山菜料理屋でインタビュールしたことがある。ニコリともしない世界的なジャズ・ピアニストの迫力あるオーラに、若い私は終始ビビりっぱなしだった。菊池ひみこさんとは、うちのカミさんが鳥取まちかどジャズに出演するプレゼンのCDを届けた際に初めてお会いしたが、秋吉さん同様、その眼力は迫力満点で、ホント怖かったなあ。

うちのカミさんも長くジャズ・ピアノを生業(なりわい)に生きて来た。どこか彼女らには共通する迫力、押し出しというものがあつて、私は日頃から妻を立て、努めて抵抗しないよう心がけている。女性ジャズ・ピアニストには、ルー・タバキンや松本正嗣さん、そして私のような「優しげくな夫」がちょうどいいのかも知れない。

ドーハへの帰還

松田 裕史

(高校教員)

ワールドカップはドーハの悲劇で苦汁をなめた戦士が帰還したと、少々感傷的な意味を与えてしまおう。

サッカーの見方はスポーツライター金子達仁の著作から学んだ。金子はサッカー批評の分野を切り拓いた先駆者であり、マイアミの奇跡を題材にした『28年目のハーフトアイム』はスポーツノンフィクションの白眉だと言える。テレビでJリーグなどサッカーを観ることもなく、新聞記事もサッカーは読まないが、金子の記事だけは追っている。

(スポーツ雑誌『ナンバー』は多種多様なスポーツを取りあげ多くのライターが記事をあげているが、サッカーに関して言えばほとんど金子を真似た二番煎じの記事しかない。僕が読まない。それだけ金子の与えた影響は大きい。) 金子によれば、中田英寿は天才ではない。中田以上の才能は存在したが(例えば小野伸二や柿谷曜一朗)、中田ほどヨーロッパで成功した日本人選手は今のところいない。中田は前線の選手にパスをする際、自分から一番遠い所にいる選手をまず、ファーストチョイスにしていたという。その選手は相手ディフェンダーも最も意識していない選手となるからだ。その選手にパスが通ればゴールに直結するキラーパスとなる。サッカーの神童、ディエゴ・馬拉ドーナは三六〇度の視野を持っていたと言われるが、そこまでいなくとも一八〇度でも十分広い。僕も中田の見方を取

十一月二十日にサッカーワールドカップがカタールで始まった。カタールと言えば「ドーハの悲劇」を思い出す世代であるが、もう二十九年前になるといふ。アジア地区最終予選、対イラク戦で勝てば初のワールドカップ出場が決まる一戦。後半終了間際まで2対1でリードしながらロスタイムに同点弾を決められワールドカップ出場を逃す。しかし、ライブでテレビ観戦をしていたのは深夜。同点弾を決められてから、テレビの解説者も絶句。数分、沈黙が続く場面は何年たつても忘れられない。その後、「マイアミの奇跡」、「ジョホールバルの歓喜」、「サントニの惨劇」など日本サッカーの転機となる試合はあったが、「ドーハの悲劇」が最も記憶に焼き付いている。まさか当時の選手の一人が監督として再びカタールの地を踏むなどとは誰も想像しえなかった。しかもそれが、ラモス、柱谷、井原などの中心選手ではなく森保になろうとは。だから、今回の

り入れ、自分から一番遠い所（生徒）を見るようにしている。教室に入った瞬間（正確に言えば廊下から教室に足を踏み入れるまでの間）、授業中などは意識してそうしている。視野や視線については佐藤学も言及しているので教育でも重要なのだろう。遅行という考え方も興味深い。攻め続ければ当然、カウンターを食らうリスクがある。カウンターの食らうても相手の攻撃をなるべく遅らせることができれば決定機を回避する可能性も高まる。焦らず、遅らせること。これも教育現場でも応用できる。即興、即断、効率では得られない教育的果実はあるはずで、「遅き」にも僕はこだわってきた。授業での教師の立ち位置を比喩的にサッカーを通して考えることもできる。監督としてベンチに座り指示を出すだけでなく、ピッチに入りボールに触り、どんだんパスを配給していく。ポジションとしては中盤のボランチか攻撃的ミッドフィルダー。どこからパスが来てどこにパスを出すべきか、予定調和ではない分、ダイナミズムも生まれやすい。この点、野球は役割が固定されすぎている授業を考えるのに相性が悪い。ただし、誰を指名するかは誰を打席に送り出すかという打順の考え方と同じ。

監督術も参考になる部分がある。現在、世界最高の監督はイギリスのマンチェスター・シティを率いるグラウディオラ（スペイン人）だが、世界のサッカーを変える戦術を

次々と生み出してきている。その影響もあり、グラウディオラが監督として所属したリーグのある国はワールドカップで優勝さえしている。（バルセロナ監督時、スペインが優勝。バイエルン監督時、ドイツが優勝）。サッカー史だけでなくスポーツ史においても傑出した監督であろうグラウディオラに学ばぬ手はない。翻って、森保監督。今回、メンバー決定の際、「個を活かす組織」と言っていたがこれはこれまでの代表監督になかった考え方だ。これまでの日本人監督は組織が先で個はその後のアイテムだったが、森保はベスト8を目指すため失敗覚悟で発想を変えている。また、仏のクラブでのパフォーマンスが良くない南野を一番として選出。ドーハの四年後、三浦カズが代表から漏れたのと対照的だ。森保には他人が見えていないものが見えているのだろう。メンバー選出の記者会見で言った「行雲流水」。その境地に至るまでには、どれほどの艱難辛苦があったことか。だからこそ、選手以上に監督である森保の一挙手一投足に注目してみたい。今回、三浦カズはある大会スポンサーのアンバサダーとしてドーハに帰還。二九年前、イラクのゴールに直結した相手選手のセントタリングに体を寄せきれなかったのはカズだった。あの時凍りついた時間が、ロスタイムの秒針が再び動き出す。

あとがき稼業

遊歴算家の証言X

芝野 浩貴 (地球探検家)

あれから1年が過ぎた。遊歴算家、数理哲人、の営みは留まるところか加速している。1年前の音信不通65号でコロナ禍における哲人の本に対する私のおとがき一覽を載せた。すると、記録魔の哲人は、私のあとがき、をも、シヴァ神の眼光として「遊歴算家の証言X」という本にしてみました。プリパス知恵の館文庫の、「目王道シリーズ69」に組み込まれている。(2022年2月22日発行)その本のおとがきは哲人が書いている。入れ子状態のおとがきブーメランである。映画に例えると、どの夢の中か現実かがわからなくなる「インセプション」。目次は以下の通り。

第1章 「数学のことば」教育のことば」*シヴァ神共著

第2章 「数学を奏でる授業」*シヴァ神共著

第3章 「遊歴算家の証言」〜新型コロナ危機」*遊歴算家の証言は年2回発行で半年分の記録

第4章 「新数学教育観に应答する学び」

第5章 「遊歴算家の証言」〜続新型コロナ危機」

第6章 「沖縄県の高校生に育む闘魂」本島編

第7章 「遊歴算家の証言」〜オンライン・コロナ・作問

第8章 「新数学観の地平を拓く」

第9章 「新数学観の地平を拓く」〜模擬問題

第10章 「気仙沼高校に育む闘魂」

第11章 「社会的知識vs数学的知識」福島瑛玉

第12章 「新数学教育観に应答する学び」

第13章 「遊歴算家の証言2020緊急事態〜新しい生活様式」

第14章 「社会的知識vs数学的知識」下関南編

第15章 「社会的知識vs数学的知識」気仙沼編

第16章 「沖縄県の高校生に育む闘魂」宮古島編

第17章 「下関南高校に育む闘魂」

第18章 「数学を奏でるための数楽譜」那覇

第19章 「数学を奏でるための数楽譜」福島

第20章 「気仙沼高校に育む闘魂」〜理系数学の核心

第21章 「遊歴算家の証言」〜第2次・第3次緊急事態宣言

第22章 「下関南高校に育む闘魂」

第23章 「視野を広げる別解」MMA

第24章 「殿堂入りの名問」板書美術館I

第25章 「殿堂入りの名問」板書美術館II

第26章 「沖縄県の高校生に育む闘魂」石垣島編

第27章 「新数学教育観に应答する学び」

第28章 「遊歴算家の証言」〜第4次緊急事態宣言

第29章 「共通テスト数学における質的変化の研究」*黒石虎雄&シヴァ神共著

第30章 「コラム数学戯評(現代数学のシヴァ神寄稿文抜粋)」

2022年の私のおとがき稼業は第26章、第27章、第28章の3冊に続き、

「数学を奏する数楽譜③山形」(4.18)

「美しきローリング・ソバット」(5.15)

「チェビシェフ多項式の研究」板書美術館 (7.14)

「フィボナッチ数列の研究」板書美術館 (8.6)

「母関数の研究」板書美術館 (8.10)

「遊歴算家の証言XI」(8.20)

「この本に対する私のあとがきより抜粋」この遊歴算家の証言シリーズは、まさに数・理・哲・人の名前の由来の、数学・科学・哲学・人文学だけでなく、政治経済・人権・社会・風土・命・文化・地理歴史・教育・法律・語学・芸術・格闘技・医学など様々な話題が記されていて、全人格的に生き抜く姿勢を伝えてくれる」

「共通テスト数学における質的变化の研究II」(8.15) *黒岩虎雄氏とシヴァ

神の共著

「俺の数学100回記念号」(9.23)

「背理法の研究」板書美術館 (10.1)

「数学的帰納法の研究」板書美術館 (10.4)

「代数不等式と解析不等式」板書美術館 (10.10)

「漸化式で数える」板書美術館 (10.20)

と昨年を上回るペースになっている。*括弧内の数字は執筆した日付である。

この文を書いている時点で、「領域と軌跡の研究」、「存在範囲と領域の研究」、「複素数平面と反転の研究」、「媒介変数表示と極方程式の研究」、「体積の研究」の原稿も仕上がっており、「THE王道シリーズ」だけでも100

冊の出版を超えている。これを読んでいる人は2年間で100冊以上の出版なんて不可能だと思われるだろう。あるいは、簡単なエッセイ本で数を稼いでいると思われるかもしれない。私は簡単な新書なら1日で100冊は読むことができるが、哲人本は数学の力があっても1日で読むことはできない。(扱われる問題は入試問題でなく、大学数学を背景とする哲人の創作問題で江戸時代の遺題継承にあたる)

ましてや消化して出力するにはかなりエネルギーを要する。最近の哲人本は、^①コードの中に自分の講義映像を組み込み、板書の様子も「板書美術館」にして綺麗な写真で披露していて、時空を超えて内容を通時的にも共時的にも多面的に捉えられるように変化している。「ハイブリッド4次元殺法本」と命名された「唯一無二」の編集となっている。文章量に関して、宮沢賢治、坂口恭平など、かなりのスピードで書く人はいる。出版本数に関しては、内田樹、佐藤優、池上彰などに数冊以上の一般書店流通本を書く人も存在する。が、売るのでなく記録することを目的にエンドレスで発行しているので申請すればギネス記録 になる出版本数となる。

心が弱っている人には不向きかもしれないが、フェイクニュースに飽きて、ゾンビ化しそうな人には、「真理の探究本」との出会いとなるだろう。国会図書館法前文にも「真理がわれらを自由にする」とあるように。関連して、「放浪の天才数学者エルデシュ」草思社文庫

「遊歴算家・山口和 奥の細道をゆく」ちくま学芸文庫」などを読まれると、令和の遊歴算家も存在することがわかると思う。

柔らかい文なので是非一読を。

オランダ人、空を飛ぶ

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

過日、マツコルランの「黄犬亭のお客たち」を読んでいた所、へとぶオランダ人〈号という船名に出くわした。おや、この名前を目にするのは二度目だ。

半世紀も前、二八の砌に、カミの『エッフェル塔の潜水夫』というミステリを読んだ。この中にもへ飛び行くオランダ人〈号という幽霊船が登場するのだ。

生憎、両著とも原文が参照できないのだが、同書内の他の訳文や、別の訳本等と照らし合わせて判断するに、少なくとも前者は英語の Flying Dutchman が使われていると思われる。ドイツ語なら Der fliegende Holländer で、今日ではへさまよえるオランダ人〈が定訳となっている。

このらで、またぞろ「わたし、気になります」の虫が騒ぎ出した。このへさまよえるオランダ人〈の訳語が定着したのは何時頃だろうか、と。

というのも、マツコルランは昭和三十二年刊の石川湧記、カミは昭和五十一年刊の吉村正一郎訳で、如何にも新しい。ワーグナーのレコードだって随分出ていた筈だが、と思うのは自然だろう。

ただ、吉村訳に関しては、初出が昭和十五年の白水社版で、その後、「世界大衆小説全集」(小山書店、同三十年)、「世界ユーモア文庫」(筑摩書房、同四十四年)を経て、五十一年に講談社文庫に入った。その後、ちくま文庫(平成二年)にも入っている。

マツコルランの別訳本『ゆうれい船』(堀尾青史、麦書房、昭和三十三年)もへとぶオランダ人〈である。

同じ頃に出たヘニツヒの『楽園はどこにあったか 世界二五の謎』(ダヴィッド社、同三十三年)にはへ空飛ぶオランダ人、あるいは幽霊船が立項されている。

文学方面はどうも頼りにならない、ということとで、次にワーグナーの歌劇を鍵に、戦前戦後の音楽書を当たるを幸いに調べてみた。

戦後のものは、みな「へさまよえる」であった。

戦前とはいえば、『レコードによるロマン派の音楽』

(あらえびす、レコード音楽社、同十二年)は「さまよへるオランダ人」、『世界音楽全集』(門馬直衛、春秋社、同十年)も「彷徨へるオランダ人」。

さらに遡って、『西洋音楽全史』(ランドルミイ、服部龍太郎訳、アルス、大正十五年)が「さまよへる和蘭人」、『西洋音楽講話』(田辺尚雄、岩波書店、同十四年改訂版)も「さまよへるオランダ人」。

これが、元版の『通俗西洋音楽講話』(田辺尚雄、同四年)では「飛び行くオランダ人」であり、『世界のオペラ』(柴田環、共益商社、同元年)も「飛行する和蘭人」である。

ちなみに、冒頭のマツコルランは、短編「薔薇王」にも同じ船名を登場させており、最古訳は「さまよへる和蘭人」(井上勇一、近代社、大正十四年)である。

確認できた最も古い文献は『泰西音楽大家伝』(細貝邦太郎、有沢潤、中川書店、明治四十年)だが、「デル、フリーゲンデー、ホルレンデル」。いやー、やられましたな。

「さまよへる和蘭人」が最初に確認できたのは、『リッヒアルト・ワークナー』(岡村寛貞編、岩波書店、大正五

年)であった。

参考までに、音楽書以外では、『性愛と恋愛』(羽太鉄治、日本評論社、大正十年)に「飛び行くオランダ人」、『精神分析法』(久保良英、心理学研究会出版部、同六年)に「さまよへる和蘭人」とある。

こうして見る限り、音楽系、非音楽系で異同・混乱が見られるものの、総じて大正五年から十五年くらいの間にオランダ人は飛んだり跳ねたりしなくなつて、海の上をさまようようになつたらしいのである。戦後に至つても、一般書で訳語がまちまちなのは、著訳者の音楽的興味のあるなしと見てよからう。

余談ながら、石ノ森章太郎の『幽霊船』(昭和三十五年連載、四十四年に『空飛ぶゆうれい船』として映画化)は、この空を飛んでいた時代(一)のオランダ人伝説に触発されて描いたものだと思ふのだが(年代から考えて、恐らくヘニツヒの著書ならん)、諸兄のお考えや如何。

鳥取あれこれ その七十六

内田 克彦（地域研究家）

「日本の学校の創立者」である鳥取出身者たちの一人として、今回は山崎壽春を取り上げる。

私が名前を知ったのは、知人に「駿台予備校を始めたのは鳥取出身者」と教えてもらってからである。ウィキペディアで調べると、「山崎壽春」と出ている。

まず、学校法人駿河台学園が刊行した『駿河台学園七十年史』（一九八八年）を見てみる。

明治二一（一八七八）年七月一八日、鳥取県鳥取市富田町に生まれた。父は郡会議員などを務めた素封家で、寿春は四男一女の三男。鳥取県尋常中学校（のちの旧制鳥取一中）から東京外国語専門学校（東京外語大学の前身）に進み、英文学を専攻。明治三五（一九〇二）年六月、同校を卒業し、同年八月から富山県高岡市立商業学校に勤務。明治三七（一九〇四）年五月には広島県私立明道中学校に教頭として迎えられ、約二年間、同校の教壇に立った。

補足すると、高等小学校を卒業したのは一八九二（明治二五）年。中学校を卒業したのは一八九九（明治三二）年である。各校の卒業生名簿には、「山崎（松岡）寿春」とある。『御大典記念 鳥取縣人物誌』（一九三二年刊）では、「村岡豊三郎氏三男として鳥取市富田町に生れ長じて鳥取県立第一中学校に入り之を卒業するや直に東都に遊し東京外国語学校英語科に入学した〔略〕而して潜心研究在学三年にして明治三十五年同校を卒はる」とある。旧姓が「松岡」なのか「村岡」なのかよく分からない。

続いて、『七十年史』から。

寿春の長兄はこの頃すでにアメリカに渡り、カリフォルニアで事業を始めていたが、この長兄の勧めに従って弟妹四人もそろって渡米〔略〕寿春は妻と生まれたばかりの長男、章を広島に残して単身渡米した。妻が病弱だったうえ、広島の高等女学校で教師をしていたためだが、いづれ妻子もアメリカに呼び寄せるつもりだったようだ。〔略〕しかし、長兄の事業は詐欺同様の被害にあつて失敗、兄弟はそれぞれ別の道を歩むことになるが、寿春はそのままアメリカに残った。

明治三九年一二月、まずアマースト大学に入学、

明治四一年二月にはハーバード大学に移って英語、英文学を専攻、同年九月にはエール大学大学院に入り、明治四三年六月、マスター・オブ・アーツの学位を得た。このあとイギリス、フランス、ドイツ、オランダを回って教育事情を視察し、同年二月、四年ぶりに帰国した。

そして、一九一一年（明治四四）年四月、明治大学講師になる。大学での講義と併せて明治大学が開いた明治高等予備校でも受験生の指導に当たった。

月刊誌『受験英語』を一九一六（大正五）年九月に創刊（関東大震災のときまで続いた）。一九一八（大正七）年には、『受験英語集』を出版している。さらに、同年一月には「高等受験講習会」を創設。主として官立高等学校入学者志願者を対象とした受験生の教育を開始する。この講習会の会場は転々とし、一九二二年に開いた冬期英語講習会は、日本大学の講堂を借りている。講師は、山崎のほか、他高等学校の教授の名前が並ぶ中、山崎と同年生まれの松江出身の佐川春水の名が挙がっている。

佐川については、森悟著『評伝 佐川春水』（二〇一九

年刊）が詳しい。佐川は、一九二〇（大正九）年に、「日進英語学校」を開設しており、その関係で講師を依頼したのだろうか。

因みに、日進英語学校は、一九三一（昭和六）年頃から次第に予備校化したとのことであるが、一九四四（昭和一九）年時局のため廃校、翌年には佐川の自宅が空襲により焼失したため松江に帰り、以後東京で再び仕事をする事とはなかった。山崎は次のように語っている。

佐川先生が再び『日進』をおやりになったら、われわれの学校の発展はなかったでしょう。

山崎は、一九二七（昭和二）年「駿台高等豫備学校」を創設。一九三〇（昭和五）年東京府から各種学校「駿台高等予備校」として認可。一九四〇（昭和一五）年春、二九年間勤めた明治大学を退職した。

『大因伯』一九三二年四月号の「学校めぐり」の中で、紹介されており、「県下出身者には入学金免除その他特典を与え各種相談には最もよき相手たらん」とある。

山崎寿春は一九六四（昭和三九）年に亡くなっている。

二〇二二・一一・二五

八代日記 (三十三)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

十一月某日

3年ぶりの妙見祭。私は初体験。午前中はあいにくの雨だったが十万人ほどの人出があったらしい。参道の途中で出張販売をさせてもらっていたが、他の出店の数も相当だった。通り過ぎる人の中に知った人もおり、挨拶させてもらったりして、少しずつだけど八代に馴染んできた気がしてしみじみした。

獅子が舞う際の銅鑼が中国風でかっこよい。でも獅子つてどこでも大体そうだけ？馬の頭を撫でさせてもらった。笠鉾や神輿も見慣れないもので興味深かった。全く妙見祭の由来や伝統については勉強していないので、これからいろいろと調べてみたい。

亀蛇と書いてガメとかキダと読む担ぎものがあるのだが、江戸時代に担ぎ手が酔っ払って疲れたのか悪ノリしたのか、「亀は水が好きだから」とか言って途中で川に沈めてダメにしてしまったことがあるらしい、という話を刃物屋さんのご主人から聞いて、なんていい話なんだと感動してしまった。

十一月某日

ワールドカップが始まった。カタール、よからぬこと

十一月某日

なんやらかんやらバタバタで、師走が前倒しになったような忙しさだが、別段稼げているわけでもなく気ばかりが焦ってしまいとても精神が落ち着かない。手帳に書きつけた用事も忘れる始末。しばらく休みたいなー。こんな時はいつもユニコーンの「いかんともしがたい男」という曲を思い出す。“あーわかりました すいませんでした 明日は必ず 必ず行きます たいしたことはないけれど 体動かなくて たいしたことはないけれど 実は 電話は 切れてる ひと晩眠れば大丈夫だから 熱もないし あーわかりました すいませんでした どうも” (作詞：奥田民生)。アルバム『ケダモノの嵐』所収。ベースラインと管弦楽アレンジも素晴らしい。あー会社休んでアルバム通してゆっくり聴きたい。

がたくさんあるようで気が乗らない。FIFAなんて真っ黒なんだろうよ。そんななかでも国家を歌わない、口元を塞ぐ、レインボアの腕章を巻こうとする、などの振る舞いには心を動かされる。中継を見ない・見せないというスポーツバーもあった。しかし某国のおそろいさんは、「政治的な振る舞いには感心しない」だと。あなたのその発言がいちばん政治的だよ。せっかく後半の素晴らしい采配と逆転劇だったのにむなしくなる。東京オリンピックもごろごろ後からよろしくない話が出てきて、超巨大なスポーツイベントってもうやめ時なんじゃないでしょうか。

十一月某日

ついに『北北西に曇と往け』（入江亜季、KADOKAWA）の6巻が発売された。買わなきゃ。だけど、先月に近所のツタヤがクローズしてしまったので、現在我が家の近所に書店はない。家の近所に書店がない、という状況はなんだか空恐ろしいような感じ。今に始まった状況ではないけれど。

あ、歩いて20分くらいのところに明林堂があるじゃないか。まだ恵まれている。ツタヤは5分とかからなかったけど、ありがたい明林堂。明林堂は大分に本社のあるチェーン系の本屋です。九州と中国地方に展開している。高校生まではとても世話になっていたが最近はあまり行けていな

かった。また通うことになるだろう。

十一月某日

職場に駐車場が二箇所あり、今日はいつもとは違う方に停めていたのだけど、いつも停めている方にいる感覚でバツクで出ようとしたら倉庫に激突してしまい、だいぶん車が凹んでしまった。悲しい。修理の見積もりに行ったら、二十万円だつて……。無理です。どうも最近運転中にぼんやりしているようなので、気をつけよう。

十一月某日

練習へ。年明けにひとまず3本ライブが入ってきて、ありがた限り。体を作り直さねばならぬ。

練習後メンバーで少しだけ飲む。ギターの佐藤くんとは中学2年生の時からつるんでいて、今年は遊び始めて三年。よくもこんなに長く遊んできたもんだと三十年を記念して乾杯。我々らしくあまり騒がしくもせずにしんみり笑いながら話して楽しんだ。

明日から文学フリマが開催されているらしいが、読みたい『機関精神史』が書店してないようので、行かず。

ドイツオペラ界の泰斗

秦阜 梅林

(楽人)

序

ヴェーバーは決して一発屋では無ひ。

「オイリュアンテ」「オペロン」「アブ・ハッサン」等がさすがに今日歌劇場で頻繁にかかる事こそ無ひけれど其の序曲等は管弦楽のレパートリーに定着、又クラリネットを主役に立てた協奏曲や室内楽には傑作が目白押し！もしクラリネット関係者でヴェーバー作品を知らない人が居たらモグリだしピアノ曲には協奏曲、ソナタなど逸品も多く渋い実力派ピアノリストには「ヴェーバー弾き」が少なくなひ。

そしてベルリオーズの汎浪漫的、華麗なるオーケストレーションによる「舞踏への勧誘」はベーム、カラヤンはじめ巨匠達のレパートリー定番で初期浪漫派の代表的傑作と謳はれて居る…

オペラ史に戻ってドイツ歌劇の変遷を辿ってゆくとグルック—モーツアルトの改革の後ヴァグナーの間に、「フィ

デーリオ」を遺したベートホーフエンは割愛してもヴェーバーを省く事は出来なひ！其れ程大切なポジションに存り、天才モーツアルトの後、一夜にしてヴァグナーの星の昂る事は無ひのである。

I 森のオペラ

とりわけ「魔弾の射手」の無ひオペラ史は語り得なひ…其の帳は一夜にしてロマンティックオペラの幕開けを高らかに告げ、独乙國民樂派の曙光を世に知らしめた…

森の神秘性、幻想性を歌ひ、畏れと共にそこに生くる民衆を描いたこの作品はシューマン、ブルックナー、ドゥヴェオルジャー、グリーク、チャイコフスキー、ブラームスら…とりわけヴァグナーに先駆け燦燦輝く明星。今日世界中の教会で賛美歌に歌はれるホルンの重奏は宗教的な荘厳さも伴ってドイツ浪漫派の指標になった…「ハーモニー・メロデイ」と呼ばれる、重層的なハーモニーの中に豊かな旋律の間かれる手法で取り分け内声の小さな動きに美しさの光る、まさにヴァグナー以前に在って余りにヴァグナー的なもの…

II 合唱オペラ

其の「狩人の合唱」をはじめ、此の作品には合唱が活躍し以降ドイツオペラでは伝統的に「民衆の声」としての合唱が表現の大切なアイテムとしてクローズアップされてくる。

アリアや重唱等あくまで「個」を重んじ「個々」の光るホモフォニックな伊オペラと、合唱や管弦楽等に重層的な群衆を見せ、様々な「人間」を多面的に聴かせるポリフォニックな独オペラの差は、実に此の辺りから国民性も伴ひいよいよ際立ってくる。さういふ意味に於いて此の作品は、オペラと云ふ舞台作品の枠を超へ「国民楽派」の一典型として「独乙的な、余りに独乙的な音楽」と言へやう。更に「ライトモテューフ」の登場でオペラの心理描写を深め意識、無意識にヴェーバーの此の記念碑的労作は、ベートーヴェン・シューベルトらが目指した方向を総括して了ったものとも言へやう。

III やがて…

其の地平線上に「彷徨へるオランダ人」やら「ロー（ヘ）エン格林」「タンホイザー」…と言ったヴァグナーの独壇場が現れ、更なる作品群で辺りは、余りにどぎつく塗り潰され、良くも悪くも…一種ファシズム的熱狂の色も帯び

突き進んで行く事になる、そんな民族の時代と宿命が到来する訳ではある、ごく当然のやうに…。自らの産んだ射手の引いたトリガーが号砲一発、凡ゆるスタートと成った事実、破滅への美字をいったひヴェーバーは洗礼のヨハネ宜しく何処迄、客観的史観を以て自覚して居たであらうか!…

2022. 11. 28

「今回の一枚」

Carl Maria von Weber 楽劇「魔弾の射手」 L. M. マタチツチ指揮、M. ショック、L. シェードレ、G. フリック、C. ニコライ、C. ワトソン、M. ベーメ他ベルリン独乙オペラ管弦楽団/合唱団 (rec. 1967年 2月ベルリン)



(イラスト・秦阜梅林)

話すことと書くこと

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

この一年間、私の周りをぐるぐる回っていたのは、話し言葉と書き言葉の話だった。

学校で仕事をしていると、生徒が出す課題におしゃべりの一言のような文が、書き残されることがある。厳しい学校に通っていた私からすると、最初は違和感があった。先生向けの書き言葉と、友達同士の書き言葉。チャット用の書き言葉と、学校の課題向けの書き言葉。そこにはきつちりとしたラインがあつて、使い分けをしていたのが、私の生徒時代だった。

書き言葉と違って臨むと、私の精神は少し背伸びする。私は、作家のような気分になって、私の中に眠る考えを磨きたいと思わせるのだ。曖昧なら曖昧なまま、その手触りを残したいし、決意にはその強さが滲むような言葉を書きたい。そんな厳しさが全ての人の人生に必要と思うのは、幻想なのかもしれない。

一方で、私はおしゃべりな人間である。話始めるのが遅

く、小さい頃は発達検査に引っかかったこともあるらしいが、そんな私が今や毎日話す仕事をしている。

おしゃべり上手かもしれないが、実際授業が上手なのかと言われると、反省ばかりである。生徒に向かって説明しながら「あれ、これってちゃんと説明できているのだろうか」と不安になる。言葉にしながら、それを研ぎ澄ます前に流れていってしまう音。話し言葉では、発する前に立ち止まることにより求められる一方で、その場で起きることに即座に対応することも求められる。

話すのは怖いが、話さずにはいられない。

書き言葉と話し言葉について真摯に取り組んだ教育学者の一人が、ヴィゴツキーである。教育心理学では避けては通れない人物だが、そのヴィゴツキーに改めて興味を持った。

ヴィゴツキーは、『思考と言語』において、話し言葉と書き言葉が全く異なる質のものであると語る。

「書きことばは、研究が明らかにしているように、高次の水準の抽象の最小限の発達を必要とする。書きことばは、音楽的・抑揚的・表情的、一般に自己のあらゆる音声的側面を欠いたことばである。それは、思想のなか、表象のなかの言葉であり、話しことばの最も本質的な特徴――

物質的音——を欠いたことばである。」

子供たちは、書き言葉への学びの動機が乏しい中で、学校などの場でそれを学ぶ羽目になっていく。そして、書き言葉を学ぶことを通して、意識的・意図的に言語を使っていくことを学ぶことになるという。

私にとって、この『音信不通』の場合は、書き言葉の場である。一方で、話し言葉の場として、一年ほど前から、友人とポッドキャストをしている。ポッドキャストとは、音声収録してネット上で配信することで、実は誰でも無料で始めることができ、AppleやSpotifyなどの音声配信アプリで配信することができる。その友人とは、隔週でお互いに本を紹介し合う番組を作っている。

日本では、ポッドキャストの盛り上がりはいまいちとも言われているが、世界的に見るとBBJなどのニュースメディアから、ミシェル・オバマのような著名人まで、多くの媒体が参画している。

今年に入ってから、私自身、他の番組を聞くようになり、新聞社がポッドキャストを配信していることを知った。その一つである朝日新聞のポッドキャストの中では、「専門家のような書き言葉でなく、話し言葉でニュースを伝えることに意味がある」とパーソナリティが語っていた。

話すことは手軽でもあり、修正が効かない怖さもある。一方で、その正直さが面白い。その人が焦っていることも、心の底から思っていることも、声音から少しずつ感じ取れる。

ポッドキャストで最近紹介した本が、『中動態の世界』だ。発売当時に読んだ本のことをもう一度読んで紹介することになった。と言っても、書き言葉として、重量感のある一冊。話して説明すると、どこかで間違ったことを言いそうな不安が襲う。それでも、社会人一年目、仕事で失敗続きの苦しくてしょうがない時に出会ったこの本のことをできる限り話し言葉で伝えようと努力した。

話し言葉の場で、あえて書き言葉の話をする。二つの世界を行き来できる人間でありたい。それは、定有堂の読む会にも通じることで、だからこそ、このポッドキャストをしていることは、先輩の皆さんの前で、あまり大きな声で言えなかった。

ということでも、もしよろしければ、私のつたない話し言葉の実践をお聞きください。



お風呂

あきの素生

(くうねるめがね)



このところ寒さに耐えられず、冬が来たらどうするのだ君と自問したくなるような恰好で過ごしている。こたつはとうに出した。気温を見ればたいして低くもないのに、困ったものだ。

その割に、お風呂はシャワーで済ませてしまうことが多い。こたつで温もつてるから湯船に浸からなくても、と言いつつ聞かせてみるが、やっぱり「冷え」が取り切れない。いろんなことを手早く片付けて、ゆっくりにお風呂に浸かる時間くらいは持ちたいものだ。

お風呂に浸かるのが心地よくなってきたのはいつ頃からだろう。子どもの頃は、肩までお湯に浸かって十秒数えてから上がるのが、何となく決まりごとのようになっていた。じつとしているのがもどかしいし、晩秋まで半袖で過ごすような熱のかたまりには、お湯の中の十秒は長く感じられた。

今や時間があれば、音楽を聴いたり、コーヒーを飲んだ

り、のぼせる手前までのんびりお湯に浸かっていたい。何かを覚えるにもよい時間だ。ぶつぶつ唱えているうちに、体の芯から温まってくる。見た目がきれいなもの、香りがよいもの、塩、いろんな入浴剤があるし、そろそろゆず湯の季節だ。家の小さな浴槽で得られる、ききやかな楽しみ。そんなことをしようと思うから、なかなか時間が取れないともいえるのだが。

熱すぎる湯は得意ではない。スーパー銭湯などで、浴槽によって湯の温度が異なっていれば、ぬるめを選ぶ。そして、ぼんやり考えごとなどしながら、ゆっくりに浸かるのだ。ぼんやりしているのは、脳内だけでなく、視界も然り。目が悪い。温泉は、めがねにはよろしくなからうから、度の合わない昔のめがねを温泉・銭湯用に使っている。加えて曇るので、浸かるときは外していることも多い。浴室内のめがねの用途は、安全に歩くこと、シャンプー、コンディショナー、ボディソープを見分けることだ。湯気だか手前の視力だかで、もわもわとした空間を見るときもなしに見湯の流れる音や湯桶と床が鳴らす音などを聞く。静寂もいいが、いろいろなものに取り紛れて自分のはつきりしなくなるというのも、なかなか心に落ち着かせてくれる。

ゆっくり浸かるという点では、露天風呂は最高だ。湯から出ている頭や顔から、どんどん熱が放たれて行って、いくらでも浸かっていられる。景色のいい露天風呂のある宿は、旅の目的地になる。海、山、夜空、お風呂からいろんな景色を見た。露天風呂ならめがねの曇りも晴れていく。

鳥取に来て、近場に温泉がいくつもあり、それらを巡るのが楽しみのひとつになった。露天風呂に行くなら、よく晴れた日や逆に雪の日などが、景色が映えそうでいい。そう思っていたのだが、ひよんなことから、小雨降る灰色の空の日に、はわい温泉に行くことになった。県外から来た知人を案内しているうちに、近くに温泉があるなら行ってみたいという話になったのだ。せつかく湖が見えるのに、天気がなあど勿体ながっていたところが、露天風呂に着いてみると、雨に煙る東郷湖が趣深く、いつまでも眺めていたいほどだった。日の差さない日特有の、曖昧に暮れていく黄昏の明度が、その景色をさらに幻想的なものにした。お風呂は湖にほど近いところに設えられていて、湖の片隅に浸かっているような開放感があり、すっかり気に入ってしまった。

露天風呂はないが、砂丘温泉でも景色を堪能した。こちらには天気がいい日にふらっと入りに行く。天気がいい日の海が好きだからだ。昼下がり、青い日本海を見ながら湯に

浸かり、満足して帰ろうとしていたら、常連と思しき方から、今日はよく晴れているから、きつと日が沈むところまで見られるよ、と教えてもらった。そう聞くと、それを見ずには帰れなくなった。太陽を直視するのはよくないだろうから、ちらちらと様子を伺いつつ、そのときを待った。空の色が変わりはじめ、橙に染まった扁平な太陽が、ぐんぐんと海に近づいていく。悠然と空を進んできたように思えるのに、沈みはじめると潔いほどの速さで太陽はその姿を水平線に隠していく。それがすべて沈みきったところで、お風呂を出た。見届けた、と満足して顔をさわると、ひりひりと痛い。お日様と対峙していたのだから当然なのだが、日に焼けていた。お風呂に入りに来て日に焼けるなんてなあ、とおかしくなった。

はわい温泉にも砂丘温泉にもその後また行って見たが、同じ景色は見られていない。あのとき、日に焼けた甲斐があつたということだろう。

お風呂上がりの一杯もいそいそ



(イラスト あきの素生)

・編集後記：

楽しみのための読書を断っているうちに(勉強はしていたよ)、秋は過ぎ去ろうとしています。ここ数か月わたしの脳内を占めていた用事が一段落し解放されたので、年末のランキングの予習にミステリを読んでおくかと思っているところ。もりもり読むぞー。

それにしても不思議なのは、「今は我慢するんだ」と念じれば念じるほど、積ん読本の山が輝いて見える点。テスト勉強をせねばならないときに限って漫画が読みたくなる、片づけをしていると余計散らかっていくのと同じ、何か人間の業を感じます(↑大きさ)。



ドラメリア(編集長)

ワクサカソウヘイさんの『出セいかツ記』が好評です。鳥取・東京の2拠点生活者。なかなか真似のできない生き方です。マジックワードの「ちよっと様子を見てみるか」。肩のチカラが抜けていいですね。

奈良敏行(発行人)

